

## 発表②【動物介在療法の導入による身体的、心理的効果】

法人名：医療法人 永好会  
事業所名：すまいるショートステイ  
サービス種別：短期入所生活介護

### ・はじめに

私は、動物専門学校を卒業し、介護の業界にはいり4年になります。動物介在療法を導入し当施設で得られた身体的・心理的効果についてまとめました。ここでは、セラピー犬：柴犬の小十郎と共に実施した動物介在の資料になります。

### ・動物介在とは

まず、私が先ほどから繰り返す「動物介在」について、具体的にどの様なものを簡単にご説明させて頂きませう。動物介在という言葉より、「アニマルセラピー」というほうがよく聞かれるのではないかと思います。最近ではメディアにも取り上げられるも多くあります。この言葉、日本の造語であり正しくは「動物介在療法」といいます。つまり、動物を介して治療を行うことで近年のペットブームや動物による単なる癒しとは違い治療という位置づけになります。動物介在療法とは、歴史的にも古くから記録が存在し9世紀にはすでに「乗馬療法」の身体機能への効果が記述されています。このように世界中で広がっており、動物を精神・身体障害などの治療行為に導入することで非薬物治療法・補助療法などの代替療法の一つとされ痛みを伴わない治療として注目されています。大きく分けて3つに分類されます《図1》。まず、AAAと呼ばれる動物介在活動。レクリエーション的要素が強く、医師やリハビリ専門職の必要性はなく年齢を問わず行えるものです。続いて、AAT動物介在療法。こちらが当施設で導入しているアニマルセラピーと呼ばれる元です。対象者を心疾患のある方や高齢者とし、医者やリハビリ専門職を交えて目標設定を行い記録や評価をし、リハビリや心のケアや治療が目的になります。最後に、AAE動物介在教育。子供を中心に、動物のふれあいや命の大切さについて教えるものになります。これらの「治療」つまりそこには専門性が必要になります。私が取得している動物介在福祉士という資格は対象となる高齢者や児童についての知識や介護技術の習得はもちろん、動物に関する知識や訓練技術も習得しており、高齢者福祉と動物学の両方を兼ね備えた資格となります。



図1

### ・セラピー犬とは

動物介在で活躍するセラピー犬について説明します。まず動物介在において犬は、車いすや杖と同じように「補助具」として扱われます。様々な訓練を受け条件を満たすものだけがセラピー犬と呼ばれます。まずは、基本的なしつけです。1.座れ待てなど基本的なしつけができていて2.トイレのしつけがされている3.人に対して、吠えたり咬んだりしない4.杖や車いすなどの福祉用具に、驚いたりしない5.ご利用者様の中には、優しく触ろうとしても叩いてしまう方、強く握ってしまう方もいます。そのような時にも、取り乱すこ

となく落ち着いてすごせるかという点です。これらの厳しい訓練を受けたセラピー犬でも、最悪の事態を考えた施設では、安全面への徹底として損害賠償を保証しています。次に、健康管理です。狂犬病予防はもちろん、ワクチン接種も年1回受けております。また健康診断をおこない、施設へ診断書の提出をしています。毎月のフィラリア予防、ノミダニの駆除も怠りません。これらは、「人畜共通感染症」と呼ばれる動物から人へ、あるいは人から動物へ感染する病気があるからです。普通の一般で飼われている犬ならば大きな問題はありませんが、施設内・病院内の免疫が低下している高齢者と接触するので、これだけの配慮がいります。また、これと同じように重要なのが、最後の衛生管理です。セラピー犬に対し、定期的なシャンプーの実施。爪は皮膚剥離しないよう最も気を付けています。また、口臭のケア、ブラッシングを行っています。セラピー犬だけでなく、担当者も洋服を着用し抜け毛予防に努めています。これらの訓練を受けたセラピー犬のみが現場へ行く事ができます。また当施設では、現場職員への勉強会を実施し理解を得て協力をして介在を行いご利用者様へは、事前にアレルギー調査も行っています。

### ・セラピー犬の勤務形態

セラピー犬「小十郎」がどのように過ごしているか一日の流れをお話します。まず、担当者と共に同伴出勤をします。出勤後は、朝ごはん当番のご利用者様に餌を与えていただき、その後担当者が業務中はサークル待機となります。午前のレクリエーションで、動物介在を1時間行っています。午後になると、再びセラピー犬はサークル待機となり、業務が落ち着き次第ご利用者様と散歩にでかけます。この際、2本リードといって1本は担当者がリードを持ちコントロールし、残りの1本はご利用者様に持っていただくことで、散歩をしていることの意識づけ、役割を果たすことにつなげています。セラピー犬は歩行訓練も受けご利用者様のペースに合わせて歩行しています。勤務終了後は、担当者と共に退社となります。小十郎は夜勤業務も行います。夜間は、

基本的にはサークル内での待機になるのですが、あるご利用者様で夜間 23 時頃まで起きて過ごしたいと希望があり TV 鑑賞や職員と談話してお過ごし頂いていましたが、他利用者様は就寝され、フロアに一人になる事もあり「迷惑かけるな…」「俺一人だな」とマイナス発言がありました。ですが、その時間をセラピー犬と共に過ごして頂く事で孤独感の解消につながることができました。また、過去には夜間徘徊、興奮されている方をセラピー犬と共に布団に誘導しぐっすりとお休まれた方もいらっしゃいます。セラピー犬と共に布団にはいることで、安心感や子供を寝かしつける感覚になられたのではないかと思います。

## ・事例

では、いくつか事例をあげて具体的な効果を発表します。ここでは、動物介在実施後ご利用者様の様子を五段階評価しました。評価基準としては、まず「表情の変化」次に「意欲、自発的な意思表示がみられたか」また、「自発てきな動きがみられるか」「積極的な発言や発語がみられるか」の4つの点を評価してグラフ化しています《図2》。

動物介在実施後、五段階評価					
	1	2	3	4	5
	悪い(-)				良い(+)
表情	 表情が暗い		音読通り	笑顔・喜びの表情が多い	
意欲	 活気なし		音読通り	自発的な意思がある	
身体の動き	 活気なし		音読通り	自発的な動きあり	
発言発語	 無言である		音読通り	自らの発言・発声	

図2

【事例1】M様の場合。構音障害があり、うまく発語ができないため意思表示する途中で諦めてしまいます。また食事は自己摂取されるのですが、口元まで腕があがりきらないことがあります。ショートステイご利用始めは、【犬は見るのもダメ】との事でセラピー犬が横を通るだけでも、のけぞって苦手と表現されるほどでした。ですが、介在を数回重ね職員が隣に付き添い話し掛けることで徐々に犬に興味を持たれ、職員の勧めで初めてセラピー犬の尾っぽに触ることができました。その後は、自ら「今日は触ってみる」と意思表示をされセラピー犬の頭に触れ、至近距離で挨拶をすることが出来ました。

セラピー犬との関係が築けた所で、M様の課題を「発語の促し」とし、介在を行いました。アプローチ方法として、【犬の名前を呼ぶ・指示を出しておやつを「待て！よし！」をさせる。】を目標に行って頂き、自然に発語増加に繋げ、自分の指示で犬が言うことを聞いたという満足感を得られるように介在を行いました。初めてセラピー犬を膝に抱くときは、少し不安そうな表情もみられましたが、徐々に表情も和らぎ今では、セラピー犬がくると自ら手を伸ばされ抱っこをしたいと意思表示されます。結果、全体レクリエーションでは静かに参加されていますがセラピー犬が来ると笑顔になり、時間はかかりますが犬の名前を呼ぼうと声を出され、積極的に触られるなど大きな変化がみられました。

【事例2】K様の場合。昔、狩猟犬を飼われていたことから犬の扱いには慣れておられセラピー犬がくると積極的に触られ元々明るい方ですが、セラピー犬が来るとより一層笑顔になられます。ですが、ご利用当初は施設利用をあまり好まれず、自宅では腰痛を原因に施設利用へ拒否があったとのこと。そこで課題として、施設利用へ意欲をもって頂き、精神的な部分からくる腰痛の軽減をあげました。アプローチ方法としては、ご本人様に当施設での役割を持って頂くため、セラピー犬のエサの準備や散歩を行って頂きました。また、セラピー犬を他利用者様と一緒に触られることで他者とのコミュニケーションが円滑にとることができ、会話も弾んでいました。「腰が痛い」と臥床されがちだったK様ですが結果、自ら「散歩に行くか？」とセラピー犬に声を掛けて下さり、セラピー犬過ごす時間を当施設での楽しみとして感じておられケアマネジャー様より「以前のようにご利用への拒否がなくなり利用日を楽しみにしておられる」とお話をいただきました。

【事例3】Y様。70代とお若く昔はハーレーを乗り回すような方で、ご自宅でも柴犬を飼われていることから犬への関心はとても高いです。ですが、施設利用に抵抗があり1泊するのが限度でレクリエーションなどの参加もされずお食事も居室で召し上がられ、入浴の拒否もあるためご利用中は、終始居室で過ごされています。そこで、課題として「施設ご利用へ少しでも楽しみを感じて頂く事」「離床時間を少しでも設ける事」をあげました。アプローチとしては、セラピー犬と居室へ出向きベッド上で触れ合いを楽しんでいただいた上で、Y様が来ることをセラピー犬も楽しみにしている事・いつでもフロアでセラピー犬が待っている事をお伝えするようにしました。回数を重ねていくと、入所されたままの流れで、フロアで介在に参加されその後の体操や歌を歌うレクリエーションにも参加して頂く事ができました。まだ、レクリエーションのためにわざわざ離床される事はありますが、ご利用のたびに本人様よりセラピー犬の話題をだされ楽しみにしていると話されています。

## ・犬嫌いの方へ

ですが、なかには犬が嫌い・昔ながらの方ですとわんわん吠えるイメージや汚いイメージから「犬なんてものは」と、なかには人間も動物も苦手。レクリエーションの参加拒否や気分が落ちているからと犬を拒まれる方もいます。そんなかたがいらっしゃる時は、犬が苦手と言われてたり事前の聞き取りで分かっているときは声のみおかけして、セラピー犬は素通りします。絶対無理にはお誘いせず、先ほどのクイズや一芸披露や道具を

使ったアジリティーなど目で見て楽しめるものをおこないます。少しでも興味を示していただいたのちに、徐々にセラピー犬との距離を縮め、あくまでもご利用者様の自らの意思でセラピー犬とのかかわりを決めていただいております。

【事例4】I様。介在開始当初は、「犬嫌い」との事で介在には不参加でした。またうつ傾向もあり他者と積極的にコミュニケーションをとられる方ではないため動物を介してコミュニケーションを円滑におこなう課題をあげました。無理強いはせず先ほどのような目で見て楽しめる介在内容でアプローチを行いました。介護職員の声掛けもあり、回数を重ねていくうちにセラピー犬の尻尾にまず触れることができるようになりました。初めは「気持ち悪い」と言われていましたが、【嫌いな犬に触れることが出来た】その事実を職員がオーバーに喜び・褒めることで本人様の自信に繋げ、徐々に背中や頭に触れることができ、最後には手からおやつをあげて頂けるようになりました。それでも、セラピー犬が手をなめると嫌な表情をされますが、犬は好きか聞くと「好きでも嫌いでもない」小十郎は好きか聞くと「好き」と答えて下さるようになりました。評価グラフからみると、まだ値は低い箇所が多いですが発語発言には大きな効果がみえ、以前よりも職員とのコミュニケーションも増えてきている様に感じます。

・主な効果

動物介在でもたらされる効果は大きく分けて3つあります。身体生理的効果《図3》社会的効果《図4》精神的効果《図5》ショートステイご利用される方には、ご自宅での家族関係に悩みや不満をもっている方が多くみえます。人には言えない、動物にしか言えない悩みを自然と外にだすことで、精神安定の効果があります。図6のグラフをご覧ください。セラピー犬がいることであなたに変化がありましたかという問いについて8割のかたが何らかの変化があったと答えています。こちらのグラフ、当施設のショートステイ職員を対象としたアンケートの結果です。このように、セラピーを体験している利用者様だけではなく、その場にいる職員・ご家族様にも効果がみられます《図7》

**身体生理的効果**

- 活動性・動機・感情刺激** 動物とのかかわる事により、認知症ケアにも必要な前頭葉の刺激、精神安定や気分転換の刺激が発生する事が多く見られる傾向があります。
- 聴覚刺激** 以前、受容を持っていたペットなど動物の飼育していた方々にとっては記憶の回想がしやすいです。
- 発声発語増大** ただ単純な発声練習よりも、犬の名前を覚える、大きな声で呼んでもらう、犬のしつけのお手伝いという設定で指示を出して頂く効果があります。
- リハビリサポート** 身体の不調や認知症や歩行障害を招いた機能訓練の中で動物を介して動機付けすることで自発性を促すことができます。楽しみながら効果・改善が期待できます。
- 血圧・コレステロール値低下** 動物と関わることで高血圧の方の血圧低下、コレステロール値低下が確認されています。

図 3

**社会潤滑油的効果**

- アイスブレイキング効果** 警戒している心を開きほぐし、楽しく人間関係を築いていく事ができます。
- 社会性拡大** 孤立・疎外感を感じている方が、動物を介することで他者との交流や社会参加の行動に繋がる傾向があります。
- 興味関心の増大** 動物との関わりがきっかけとして、それに関わる様々な存在に対して興味関心が広がります。
- 外出機会増大** 動物を動機付けとして、閉じこもり防止や外出機会の確保が行いやすくなり社会参加に繋がります。
- 総合的な社会参加** 様々な経験や体験を通して対象者の自信回復に繋がります。社会へ踏み出すきっかけとなります。

図 4

**精神情緒的効果**

- カタルシス(浄化)作用** 心の奥にある不安や苦悶などの感情が自然と言葉で表現され、それにより精神不安・苦悶が解消され安堵感が自然に得ることがあります。
- 自発性拡大** 愛着が生まれ、この子のために何かをあげたい!という自発性が生まれます。
- ストレス軽減** 犬に触れることで、その手触りや温かみで心が落ち着き、孤独感が緩和されストレス軽減します。
- 精神安定** 犬の体温、柔らかな性格や穏やかな動きが心を落ち着かせる効果があります。
- プロダクティブエンジン** 仕事や家事などの義務的な労働から解放された受講者が、これからの人生を豊かに過ごすに当たり自立を求め、最後まで必要とされるから生きる事の喜び。

図 5

**ショートステイ職員を対象としたアンケート**

■セラピー犬がいることであなたに変化がありましたか 《仕事への意識、感情の変化など》

● 変化あり  
● 多少の変化あり  
● 変化なし  
● 変化不明

- ・ストレスを感じる時にセラピー犬を触ると心が落ち着き、鬱鬱とした気持ちが発散されストレスが軽減する。
- ・介護施設特有の閉塞感を少しずつ軽減する事ができている。
- ・自身もセラピー犬が来るのを楽しみにしている。
- ・他の所でも犬と触れたいという声が多く聞かれた。
- ・セラピー犬との距離でスタッフとのコミュニケーションが増えた。

図 6

**二次的波及効果**

対象者の周りに存在する人にも与える影響のことです。

【家族・職員の間...】  
介護者や受講者へ、施設滞在時間の増大、ストレス軽減、介護負担軽減、楽しみや喜びを共有できます。

図 7

・最後に

動物介在において、当施設で重要としていること強要や特別なことはせずご利用者様に聞いて・見て・触って・感じて頂きご利用者様の感性を第一にして与えるばかりでなく役割をもって頂くことで達成感や必要とされる喜びを感じて頂ける動物介在を行っています。

以上